

唐大明宮太液池の調査と共同研究

はじめに

2001年から5ヵ年計画で進めてきた太液池遺跡の共同発掘調査は本年度をもって終了した。ここでは2005年春季の発掘調査と秋季の共同研究の概要を報告する。

なお、春季の発掘調査成果は、中国社会科学院考古研究所・日本独立行政法人文化財研究所奈良文化財研究所連合考古隊「西安唐長安城大明宮太液池遺址の新発現」として、『考古』2005年12期に発表した。以下の調査成果については『考古』掲載の報文を基礎とする。

調査経緯

発掘調査期間は2005年2月から5月、調査区は太液池（西池）の東南岸に位置する（図14）。この一帯は2000年におこなった試掘の結果、遺構の残存状況が良好であることがあきらかになっている。今回はさらに詳細な状況を把握するために、3ヵ所の試掘区を連結し、拡張する形で調査区を設定した。発掘総面積は約2,800㎡である。生活道路を挟んで東区と西区に分けた。

当研究所からは川越俊一平城宮跡発掘調査部長、岡村道雄協力調整官、加藤真二、中村一郎、森川実、栗野隆、今井晃樹が参加した。中国側は安家瑤漢唐研究室主任、龔国強、李春林、何歳利の4名である。

調査成果

池岸 東区、西区ともに池岸の平面形には凹凸がある（図15、図16）。とくに東区西端は池内に舌状に突出しており、その一部を検出した。池岸は版築で造営され、岸の高さは池底の堆積土上面から約1.5mある。岸が直線的なところは傾斜がきつく、曲線的なところは傾斜が緩い。岸の護岸は木杭のほか、傾斜面に磚を貼りつけたり、磚積み擁壁をつくるなど部分的な補修がある。岸上には磚の破片を敷き詰めた道路、磚組みあるいは土管を用いた排水溝が設けられ、水は池に流れ込む。

高床式の廊 東区の中央部と西区東端の池岸は直線的で、傾斜がきつい。この付近の池内には、磚、瓦当、鴟尾、礎石、三彩容器などが大量に堆積しており、これらを取り除くと池底堆積土上面で3組の柱穴列が検出された。岸よりの1組は柱穴の径が7～15cm程度で付近から木板も出土しており、護岸の機能を果たしていたと考えら

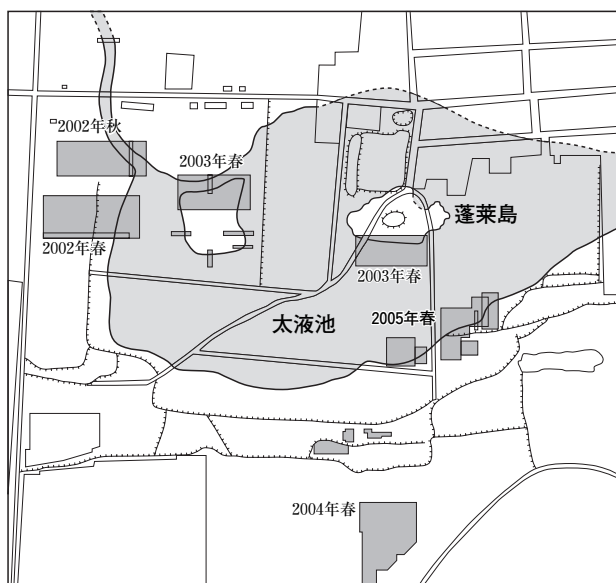


図14 太液池の発掘調査位置図

れる。中間の1組は杭が斜めに打ち込まれており、その向きも一定していない。池側の組は柱穴径が大きく25～30cmほどある。穴の壁面には赤漆や木目が残存していた。

これらの柱穴列に対応する東区の岸上には、4基の特殊な礎石据付穴（礎壇壝）が検出された。これらは池内の柱穴列や礎石、瓦類などとともに、水上に張り出す廊状の建物を形成していたと考える。礎壇壝とは、穴の底に数本の杭を打ち込み（乱杭）、礎石の重みを支えるという特殊な工法をもちいた礎石据付穴をいう。

釣殿 東区西端にある舌状突出部の基部から岸の傾斜面、池底にかけて、規則的にならぶ礎壇壝が検出された。岸上の4基は平面長方形、傾斜面と池内の壝は不定形を呈す。傾斜面と池内の礎壇壝内と周囲には多量の灰燼や焼けた石製部材が出土したことから、この部分には水上に建設された釣殿状の建物、建物と岸との間には廊あるいは橋などの建造物があったと考えられる。

池底の堆積層 池底には沈殿したシルト質の堆積層がある。池内の遺構はこの層の上面で検出された。堆積層内には巻き貝、蓮の葉、蓮の花托などが多くみられた。

遺物 瓦磚類では、多種多様な蓮華文瓦当、波状文様の軒平瓦のほか、丸瓦、平瓦、鴟尾、獸面磚、蓮華文方磚、無紋磚などが大量に出土した。陶磁器類は、三彩の碗、盤、注壺、罐、枕、絞胎枕、越州青磁、「盈」字あるいは「官」字を刻した白磁片などがある。

もっとも注目されるのは、石製の欄干である（図版1）。高さ66.0cm、幅126.5cm、厚み15.5cmをはかる。青石製で架木（手摺）と彫刻部分からなる。彫刻は龍を主題に周囲に卷雲文を配す。架木と彫刻部の間にも卷雲文をかざる。左右両側面にはほぞとほぞ穴、底面にもほぞを備え望柱や地覆石と連結する。このほか、獅子像をのせる



図15 東区全景（北東から）

蓮華座望柱、2面の顔をもつ菩薩頭像、サイ像、獅子像、青石製礎石、片麻岩の景石などが出土した。

本年度の調査では、水上の建物遺構、優美な石製の部材や彫刻が出土し、当時の池および池周囲の景観を考える上で、重要な資料を得ることができた。また、2006年1月には軒瓦、丸平瓦の調査をおこなった。今後は日中双方で発掘資料の整理や分析を進行し、報告書出版にむけての共同研究を継続する。

学術交流

秋季には、中国社会科学院考古研究所から計6名の研究者を日本に招聘した。藤原宮京、平城宮京の発掘資料を調査したほか、近畿圏にある7、8世紀の遺跡や遺物を見学した。日本における遺物の保存方法、遺跡の保護と整備事業に関する意見交換をおこなった。

また、来日にさいして中国考古学における最新の成果を発表していただいた。以下、各発表の要旨をまとめる。

安家瑶「広州南漢康陵出土のガラス器」

康陵は五代十国時代に現在の広東省、広西省一帯を支配した南漢国初代皇帝の陵墓である。この陵墓からは多数のガラス器片が出土した。復原した瓶は型にはめてつくった吹きガラスで、表面には稜線が飾られる。こうした特徴は、同時代のイスラムガラス器と共通しており、康陵のガラス器は輸入品と考えられ、中国のガラス交易研究における新しい資料となる。

龔国強「2005年唐大明宮太液池跡の最新成果」

2005年春季の太液池遺跡における調査成果を、多数のスライドをまじえながら紹介した。内容は本概報を参照。

石自社「隋唐洛陽城の坊と市の発掘調査と研究」

近年の隋唐洛陽城における京域の調査成果を紹介した。南市の調査では、市内に流れる運河と主要道路、周囲からサイコロ、将棋の駒、碁石などが出土する遊戯具店や複数の竈をもつ飲食店の遺構などを発見した。居住区である溫柔坊、恭安坊では、坊内の主要道路と坊牆、坊門のほか、庭園をもつ邸宅を発掘した。都城内の日常



図16 西区全景（北東から）

生活の様子を知る上で重要な資料である。

王吉懷「尉遲寺集落遺跡の発見とその意義」

安徽省蒙城县にある同遺跡は、大汶口文化から龍山文化まで約3000年間、5mほどの堆積がみられる。径240mをはかる環濠集落のなかには、木骨土壁の長屋式住居や大型の祭祀広場が発見された。多数の土器のほか、祭祀に関連する鳥形の遺物、米、粟などが出土している。また、甕棺墓なども発掘されている。これらの資料から当時の集落の景観、生活環境、社会制度などを復原した。

鐘建「磁気探査による考古学調査」

近年の中国における遺跡探査の事例を紹介する。中国では伝統的な遺跡探査方法である洛陽鐘に代わり、物理探査が導入された。なかでも、磁気探査の応用例が紹介された。山西省陶寺遺跡、山東省教場鋪遺跡における新石器時代の城壁の範囲と形状の確定、陝西省西安市唐長安城木塔寺における建物基壇の発見、青海省民和県喇家遺跡の範囲確定、内蒙古自治区赤峰市紅山文化遺跡の祭壇や住居址の発見など、多数の成果があった。

朱岩石「中国河北省鄴城遺跡の研究と新発見について」

魏晋南北朝時代の都城のひとつである鄴城遺跡の最新成果を紹介する。これまでの同遺跡の調査を概括したのち、近年内城で発掘された塔基壇の調査成果について多数のスライドをまじえて紹介した。また、鄴城遺跡内外で採集された遺物や文字資料、近年のボーリング調査の成果を総合し、内城の外側に外郭城があった可能性を示すなど、あたらしい研究成果が公表された。

おわりに

両研究所の共同調査は発掘と学術交流を柱として進めてきた。日中両研究所のこれまでの成果をふまえた上で、今後も、日本を含む東アジア古代都城の起源や形成を主題にすえた共同研究を継続発展させていく予定である。

（今井晃樹）